ISSN 2188-7330

ふみ

第15号
2021年
1月発行

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

CONTENTS

「記憶の解凍」
―カラー化写真をもとにした〝フロー〟の生成と記憶の継承
東京大学大学院情報学環　教授　渡邉　英徳 …… ❶～❸
文学の空間を表示する「日本のデジタル文学地図」
ハイデルベルク大学 東アジア研究センター・日本学科　教授　ユディット アロカイ …… ❹～❺
大規模データ蓄積からデータ駆動へ
―「データ駆動による課題解決型人文学の創成」の提案―
国文学研究資料館 人文学データ駆動研究センター 教授
学術大型研究計画設置準備室長　海野　圭介 …… ❻～❼
イベント報告
古典籍共同研究事業センター …… ❽～❾
新日本古典籍総合データベースの文庫情報
国文学研究資料館　特任准教授　宮本　祐規子 …… ❿
こんな古典籍があった！
～拠点大学古典籍画像紹介～ …… ⓫
トピックス …… ⓬

「記憶の解凍」―カラー化写真をもとにした〝フロー〟の生成と記憶の継承

東京大学大学院情報学環　教授　渡邉（わたなべ）　英徳（ひでのり）

一．はじめに

現代の社会においては、〝ストック〟されているデータから〝フロー〟を生みだすことによって、コミュニケーションが創発し、情報の価値が高まるとされる[1]。本稿ではその一例として、社会に〝ストック〟されている白黒写真をカラー化し、〝フロー〟を生成する「記憶の解凍」プロジェクトの活動について述べる。

被写体が備えていた色彩を擬似的に可視化することによって、白黒写真の「凍りついた」印象が解かされ、写し込まれたできごとをイメージしやすくなる。このことは、過去のできごとと現在の日常との距離を近づけ、鑑賞者のコミュニケーションを誘発する。

つまり、白黒写真をカラー化することで〝フロー〟が生成されている。この〝フロー〟においては、活発なコミュニケーションが創発し、情報の価値が高められる。その結果として、貴重な資料とできごとの記憶が、未来に継承されていくことになる。

二．白黒写真のカラー化

戦前・戦中の写真はもっぱらモノクロフィルムで撮影されている。スマートフォンのカメラで日常を記録する私たちは、白黒写真にあたかも「凍りついて」いるような印象を抱く。このことが、写し込まれた過去のできごとと、現在を生きる私たちの日常との距離を遠ざけ、自分ごととして考えるきっかけを奪ってはいないだろうか。

筆者らはこの問題意識のもと、飯塚らのＡＩ技術[2]などを応用し、白黒写真のカラー化を進めてきた。これらの技術は、膨大な数の白黒・カラー写真を

「記憶の解凍」―カラー化写真をもとにした〝フロー〟の生成と記憶の継承

東京大学大学院情報学環　教授　渡邉　英徳

学習したＡＩによって、白黒写真を着彩する。ただし人工物のカラー化は苦手なため、不自然に色付けされがちである。そこで、戦争体験者との対話・ＳＮＳで寄せられたコメント・資料などをもとに、手作業で色補正し、より自然な印象に近づけていく。

図１に、呉からみた広島原爆のきのこ雲の元写真と、色補正後のカラー化写真を示す。グレーのグラデーションだった過去の空が、現在の青空のように色付く。山や海面などの色彩は、私たちが日頃目にするものである。そこに強烈な異物感を伴った「きのこ雲」が挿入される。被写体が備えていた色彩を擬似的に可視化することで、過去にも、現在と変わらない日常があったこと、そして原爆投下当日におきた「できごと」と私たちの日常が重ね合わされていく。

図1「呉からみた広島原爆のきのこ雲」の元写真・カラー化写真（撮影：尾木正己）

三．カラー化写真をもとにした〝フロー〟の生成

ソーシャルメディアのタイムラインに投稿される現在のカラー写真は、自明的に同時性を備えている。過去の白黒写真をそのまま投稿した場合、その凍りついた印象は、ユーザの意識のなかで、タイムラインをフリーズさせるはずである。白黒写真をカラー化することで、このフリーズを回避し、写真に写し込まれたできごとの印象を解かして、ユーザの身の回りの時間の流れ＝〝フロー〟に合流させることができるのではないだろうか。

筆者らはこの推測に基づき、デジタルアーカイブの写真をカラー化し、Twitterに投稿することで〝フロー〟を生成する活動を続けている※。投稿したカラー化写真は広く拡散され、多数のリプライが付く。こうして、カラー化写真をもとにした〝フロー〟が生成され、写真そのものについての感想、撮影地の特定、時代考証などのコミュニケーションが創発する。この〝フロー〟においては、新たに得られた情報をもとに色補正が加えられ、精度が向上していく。

図２に、Twitter上の〝フロー〟において更新されていったカ

図2　「呉からみた広島原爆のきのこ雲」の各バージョン

ラー化写真の例を示す。この〝フロー〟においては、図1に「呉からみた広島原爆のきのこ雲」の色彩について、映画「この世界の片隅に」監督の片渕須直氏とのコミュニケーションが創発した。

右上:元写真
左上:AIが自動カラー化したもの
右下:片渕氏の「オレンジ色である」との考証を受けて色補正したもの
左下:さらに詳細な考証(図3)を受けて再補正したもの

こうした、オープンな場で生成する〝フロー〟には、多数のユーザが参画する。ユーザ間で活発なコミュニケーションが創発し、共同作業により情報の価値が高められる。結果として、過去の「できごと」にまつわる記憶が多くの人の心のなかに息づき、未来に継承されていくことになるのだ。

国文研が扱う古典籍や古文書の中にも、白黒写真しか残っていないものも多くあると伺っている。そうした画像のカラー化も今後オープンな場で取り組むべき課題となるに違いない。

図3　片渕須直氏による考証

四. おわりに

本稿では、既発表の論文[3](CC-BY 4.0で公開)の一部を抜粋・改稿し、「記憶の解凍」プロジェクトのコンセプトと活動の一部について説明した。個人蔵の写真の収集、実空間での〝フロー〟生成などを含む全体像については、論文[3]及び書籍[4]を参照されたい。

参考文献

[1] ケヴィン・ケリー(著)、服部桂(訳)『〈インターネット〉の次に来るもの 未来を決める12の法則』、二〇一六年、NHK出版、403p

[2] Satoshi Iizuka, Edgar Simo-Serra, Hiroshi Ishikawa「Let there be Color!: Joint End-to-end Learning of Global and Local Image Priors for Automatic Image Colorization with Simultaneous Classification」『ACM Transactions on Graphics (Proc. of SIGGRAPH)』, 2016,vol. 35, no. 4, #110

[3] 渡邉英徳、庭田杏珠「『記憶の解凍』カラー化写真をもとにした〝フロー〟の生成と記憶の継承」『デジタルアーカイブ学会誌』第3巻第3号、二〇一九年、p.317-323

[4] 庭田杏珠、渡邉英徳『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』、二〇二〇年、光文社、472p

※筆者のTwitterアカウント
https://twitter.com/hwtnv/media

【異分野融合共同研究】

文学の空間を表示する「日本のデジタル文学地図」

ハイデルベルク大学東アジア研究センター・日本学科　教授
ユディット アロカイ
(Judit Árokay)

日本文学において長い伝統を持つ歌枕・名所は、ジャンルの境界を越える空間的な秩序を形成している。歌枕・名所は関連文献を呼び起こしながら、古来のテクストやイメージを連想させる修辞的表現で、日本古典文学を読む際、地名の持つイメージや意味がテクスト理解に深くかかわっている。古典文学に数百年の間も影響を与えた歌枕は、地理的な地名と言うよりもその場所の詩歌的、文学的、文化的なイメージそのものである。そのイメージが宮廷和歌の発展に伴って十世紀からある程度定着するが、その後も次々と変化していく。主に和歌から発生した歌枕は物語、軍記、説話、謡曲、浄瑠璃に影響を与えながら、新たな様々なテクストによって逆に変容されていく。名所のイメージ形成には詩歌や文学だけではなく、歴史と宗教の影響も大きい。様々なテクストによって構築された象徴的な、視覚的なイメージを知らない限り、テクスト理解が不可能といっても過言ではない。このプログラムは日本文学における歌枕・名所を地図上に表示し、その背景にある歴史的、文化的、ポエティックな意味を提供していくものである。

日本デジタル文学地図(DLM)プロジェクトでは、この伝統を踏まえ、歌枕・名所についての様々な情報を集めて、現在可能になったデジタル表現を生かして、前近代における名所を紹介するサイトの実現に取り組んでいる。歌枕・名所の生成と展開を、和歌・物語・謡曲・俳諧・紀行文などを挙げながら、紹介していく試みである。「日本のデジタル地図」を入り口にして国文学研究資料館所蔵の日本の古典テクスト・原本画像にアクセスする仕組みと、歌枕・名所に関する付加情報を提供し、古典をはじめとする日本文化史を提示するツールとなっている。

本プロジェクトは、二〇一五年にハイデルベルク大学のMarsilius Kolleg(文理融合プロジェクト支援機関)の援助を得てシステムを構築し、試作するところから始まった。二〇一六年に大阪大学文学研究科の飯倉洋一教授が開催した国際ワークショップ「デジタル文学地図の試み」の場で初めて日本でも紹介することができた。二〇一七年度からの三年間は、国文学研究資料館と大阪大学・ハイデルベルク大学の国際共同研究として、コ

日本のデジタル文学地図Webサイト
https://literarymaps.nijl.ac.jp/#!/

ンテンツの拡充やプログラムの改善に努めた。毎年ワークショップ・シンポジウムを開催し、日本国内・国外のほかのプロジェクトと意見交換しながら、DLMのツールとしての機能を強化してきた。

スポットの表示は、今でも特定できる場所の場合、Google Mapsの緯度経度を使ってOpen Street Mapに表示し、川や平原など広い範囲を示す歌枕については、特徴的な風物や著名な史跡・寺社等を基準として表示した。地図上に表したうえで、地誌情報、根本的な歴史情報を提供して、地名にかかわる和歌を基に歌枕としての特徴を、例を挙げながら紹介していく。歌枕としての意味や具体的なイメージをいくつかの和歌を挙げて、分かりやすく提示している。今年度（二〇二〇年）の段階では、「八代集」からの引用を基に四十五か所についての情報や和歌を紹介するまでに至っている。物語や説話の中に現れる場合は、歌枕のイメージ形成につながる部分を引用し、それに当該地域のイメージ、地域に位置する代表的な山水・寺院・風物などの実景を描いた画像を載せている。画像は主として、近世期に出版された名所図会類や地誌類・浮世絵版画の類である。著作権やCCライセンスのこともあって、直接該当ページに飛べるようにWebリンクを貼っている。古典籍については、国立国会図書館デジタルコレクションはページごとのリンクができないため、基本的には、国文学研究資料館『新日本古典籍総合データベース』を利用。絵画・絵巻などについては適宜博物館（東京国立博物館など）のデータベースも利用する。

データ収集、データ表示
https://literarymaps.nijl.ac.jp/#!/app/spots

本プロジェクトの次の段階では、歌枕の数を増やし、歌枕が取り上げられる物語、説話、謡曲からの引用や画像を補いながら、サイトの拡大に努力する。現在の技術で可能になるデータ収集と保存は、様々なメディアの同時的な表示を可能にするほか、文学ジャンルを超えて、実用的なテクストや画像を組み合わせることによって、歌枕・名所のイメージを立体的に視覚化できる。技術上の改善として考えているのは、サーチ機能やネットワークビジュアライゼーション、タイムラインを提供することである。サイトがより使いやすくなり、様々な視点に応じることができる。将来的には、アプリ自体をオープンソースにすることやデータ収集のクラウドソーシング化も考えられる。

地図を中心に、文学史、詩歌史の境界を超える、古典籍と歴史資料・古文書、テクストと画像の組み合わせで現代的な「地誌」が可能になると、研究上、教育上の意味も大きい。娯楽的な機能としては、信頼できる文献に基づく、旅行のための名所ガイドツールの可能性もあるだろう。

大規模データ蓄積からデータ駆動へ
―「データ駆動による課題解決型人文学の創成」の提案―

国文学研究資料館　教授
人文学データ駆動研究センター・
学術大型研究計画設置準備室長
海野（うんの）　圭介（けいすけ）

文部科学省の推進する大規模学術フロンティア促進事業として平成二十六年度（二〇一四年度）より推進してきた「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」も、七年目を終えようとしている。その後を見据え、新たに提案していた「データ駆動による課題解決型人文学の創成」と題した計画が、九月三十日に公開された「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想ロードマップの策定―ロードマップ2020―」（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1388523_00001.htm）に十五件の研究計画の一つとして策定された。計画の全体像を短い文章で示すことは難しいが、この場を借りて立案の背景と基本的な考え方について述べてみたい。

国内外に所蔵される歴史的典籍三十万点の全文のデジタル画像データの蓄積とオンライン提供、画像データに基づく共同研究等を通した国際ネットワーク構築計画も連携諸機関等の協力を得て順調に進み、令和二年（二〇二〇年度）三月時点で十四万八千点の画像データ化が済み、終了年度の令和五年度（二〇二三年度）までに当初計画に定められた三十万点に到達する予定である。

書物の全冊を撮影した画像データのオンライン化によって、従来、図書館や研究機関の中に保管され、それぞれの分野の専門研究者以外の目に触れる機会の多くはなかった日本の書物の内容を、分野を異にする研究者はもちろん、国内外の誰でもが目にし、それを読むことができるようになった。『源氏物語』が著されてから一〇〇〇年が経過し、『古事記』の成立は一三〇〇年、聖徳太子の注解と伝える『三経義疏』の執筆は一四〇〇年を遡るが、こうした一〇〇〇年を越える長い年月をかけて日本の書物に記し留められ、伝えられてきた知識や経験を居ながらに目にすることができるようになったことは、日本語の歴史的典籍に蓄積された情報やデータが誰にでも活用できるようになったことを意味している。

実際に、全国各地の大学や共同利用機関との協働により、歴史的典籍画像データを用いた新たな研究課題の設定と領域開拓的研究も行われている。地域の価値創出を目指した古典籍データの観光資源化への取り組みである「津軽デジタル風土記の構築」（研究代表者、弘前大学教授　瀧本壽史）、また、地球環境保全や減災に関する研究に歴史的典籍に蓄積された天文や気候変動情報を活用する、「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた新たな研究分野の創成」（研究代表者、茨城大学准教授　田村誠）、「典籍等の天文・気候情報に基づく減災研究の基盤整備」（研究代表者、国立極地研究所准教授　片岡龍峰）による試みなどは、歴史的典籍データの活用範囲の広さとその有効性を実証している。

歴史的典籍のデジタル画像データは、今後も利用範囲を広げ、様々な分野での活用を促しながら、同時に研究の目的や方法、あるいはそのあり方そのものの更新や変革を牽引することも予想され

る。しかしながら、そうした方向へと速やかに展開するためには、データのさらなる高度化を含む幾つかの課題が残されている。

三十万点という画像データの規模は容易には想像しがたいが、例えば、それぞれの書物が各百五十丁(「丁」は古典籍のページ一枚を数える単位。現在の感覚の二ページ分にあたる)の分量を持つと仮定すると、一枚の画像データに一丁(二ページ)分を撮影する現在の撮影方法で四千五百万枚の画像データが作成されることになる。その内容を確認するには、十秒に一枚の画像データに目を通したとして、まったく休憩をとらずに読み進めて十五年弱かかる。個々の人間には到底読破できる分量ではない。三十万点という大規模データ構築の次には、構築したデータから必要な情報を速やかに取り出すこと、それを自在に利用することのできる環境の構築が求められることは誰の目にも明らかであろう。

構築された膨大なデータを十全に活用するためには、人間の手と目を離れた機械処理は不可欠である。現時点においても画像データには検索用のタグを付し、また、画像データ全体をテキスト化するためのＡＩを用いた認識技術についての実証試験を重ねるなど、情報検索の利便性の向上とデータ抽出に関わる技術開発は進めているが、こうした実験的試みを踏まえて、デジタル画像データの機械可読化、生成されるデータの構造化といった実用化へ向けた取り組み、さらにはそうした先には、膨大なデータからの情報抽出と抽出された情報の組みあわせて得られたデータを基盤として発想するデータ科学としての人文学のあり方が問われなければならないだろう。また、そうした分野を担う人文学領域と情報学を中心とした自然科学領域の双方に通じた人材の育成も急務である。書物に蓄積されてきた膨大な情報、また書物の情報をめぐって人文学分野の蓄積してきた成果を現代社会の包摂する様々な課題に対応させてその解決をはかるために活用し、それを実践してゆくことが後継計画の掲げる大きな目的である。

データ構築と整備および分析技術の高度化とともに、現行の計画で設定したデータの収集範囲の再検討も必要となる。時間軸においては、歴史的典籍の範囲を拡充し、少なくとも帝国図書館の設置される明治三十年(一八九七)前後まで拡充し、国立国会図書館デジタルコレクションとして公開される大規模データとの連続性の確保することは必須であろうし、また、地理的には、日本国外に所蔵される各種コレクションとも連携してゆく必要性も感じている。また、フィジカルデータとしての書物には、その構成物としての植物由来の成分と人間と書物の歴史の痕跡としての毛髪や手垢といった付着物が伝える人間に由来する情報も蓄積されており、書物の作成とその味読による知識の集積と伝播、その人間社会形成との相関の歴史を伝える資料となる。こうした書物が蓄積してきた文字情報・図像情報以外の情報のデータ化とその集約も歴史的典籍のデータ化とその利活用のための課題である。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行は、その感染対策として人と人との接触の制限が求められ、対面からオンラインへ、紙からデータへというように社会活動のあり方を劇的に変化させた。様々な領域にデータの活用が拡大し、あらゆる分野に波及してゆく時代がはからずも一気に到来したと言える。こうした社会変化を前提として、時間や地理的制約を超えた新たな研究活動を支えるインフラ構築に基づく研究のデジタル・トランスフォーメーションを推進してゆくことも、本計画の重要な役割と考えている。

イベント報告

古典籍共同研究事業センター

コロナ禍においても、オンラインで開催された学会、イベントや、対面で開催されたイベント等、多くの機会を利用しNW事業の情報発信を行っています。その一端をご紹介します。

日本語学会二〇二〇年度秋季大会

十月二十四日(土)～二十五日(日)、オンラインで開催された日本語学会二〇二〇年度秋季大会において、「国文学研究資料館の情報資源の日本語学研究への活用」と題し、歴史的典籍NW事業が持つ情報資源としての有意性についてワークショップを行いました。当館からは山本和明センター長、宮本祐規子特任准教授、外部からは、昨年度まで当館特任助教で、現在北海学園大学の岡田一祐先生、日本女子大学の清水康行先生にご参加いただき活発な質疑応答がなされました。

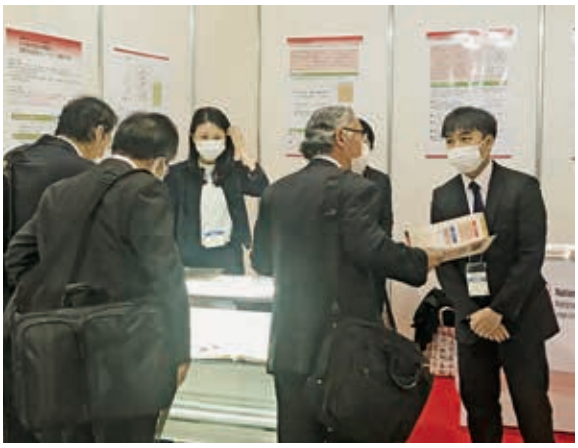
第五回 関西教育ICT展

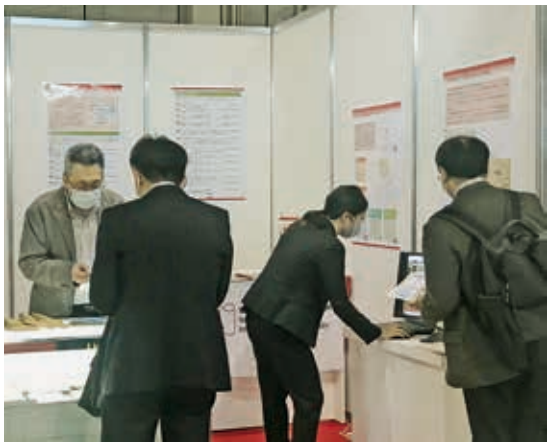
十月二十九日(木)～三十日(金)、第五回 関西教育ICT展が新型コロナの感染拡大の影響により、延期となっていましたが、万全な感染対策の中、インテックス大阪(大阪市住之江区南港北)で開催されました。

国文学研究資料館として初出展となる今回、教育の現場での古典籍の活用について、教育関係者に向けて「新日本古典籍総合データベース」を紹介しました。

三千人の来場者を数えましたが、多くの方々に現在撮影が進行中の武庫川女子大学ご所蔵の貴重書を見ていただいたり、国文学研究資料館が持ち込んだ古典籍を実際に手に取っていただくことにより、古典籍を身近に感じていただく良い機会となりました。

会場内で行われたセミナーでは、「典故知新―残された先人の知を学びに―」と題し、古典籍に残された知をどのように教育の場で活用していけるのか、その可能性についてセンター長





展示ブースの様子

が講演を行いました。

第二十二回 図書館総合展

十一月一日(日)～三十日(月)、図書館をテーマとする国内最大級の展示会・図書館総合展が開催されました。

第二十二回にあたる今年は、新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン形式での開催となり、これまで会場に足を運ぶことが難しかった方々も参加することができるようになりました。

国文研でも例年図書館総合展に参加していますが、今年はオンラインブースを出展し、新日本古典籍総合データベースおよび関連するコンテンツの紹介、国文研で行っている古典籍デジタル撮影についての紹介を行いました。このほか、事業紹介および古典籍デジタル撮影に関する動画を新たに作成し、オンラインブースにて公開しました。時間・場所を問わずどなたでも見られる形式となったことで、より多くの方々に関心を持っていただける機会となりました。

セミナー「典故知新―残された先人の知を学びに―」講演の様子

オンラインでのブース出展の様子

新日本古典籍総合データベースの文庫情報

国文学研究資料館　特任准教授　宮本（みやもと）　祐規子（ゆきこ）

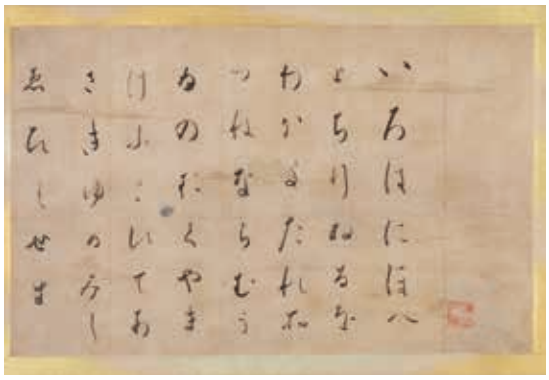
本稿では、歴史的典籍NW事業に関連する国文学研究資料館所蔵のコレクションを紹介したい。紹介したコレクションは、「新日本古典籍総合DB」にて公開されている。

・東京書籍株式会社附設教科書図書館　東書文庫（文庫番号TSHB、公開点数二〇四一、略称　東書文庫）

本文庫は、昭和十一（一九三六）年に開館した、日本初の教科書図書館（東京都北区）。空襲による焼失を免れ、約十六万点の資料を所蔵する。ここには、国の重要文化財に指定される「近代教科書関係資料」や、謙堂文庫（石川謙氏の教育史関係の記録、文書、文献コレクション）から譲渡された中・近世の教科書資料類も含まれている。

新日本古典籍総合DBでは、二〇一八年から公開が開始された。今年八月にも約千点を新規公開したところで、今後もデジタル化・公開を進める予定である。

文庫所蔵で最も古い資料である『いろは歌』は、世尊寺経朝による鎌倉時代中期の写本。後の往来物（近世期の庶民向け学校として知られる寺子屋で使用された教材類を指す）の原型となった古往来の一つ。



『いろは歌』
書誌ID：100261542、DOI：10.20730/100261542
http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100261542/viewer/8

近世期の往来物は非常に多種多様であり、本文庫も膨大な所蔵数を誇る。たとえば、有名な『実語教童子教』は、四十六点公開しており、比較等も容易である。その他、地誌類や辞書類、明治期に出版されたものまで、幅広いコレクションになっている。

『実語教童子教』
書誌ID：100266840、DOI：10.20730/100266840
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100266840/viewer/2

『実語教童子教』
書誌ID：100266841DOI：10.20730/100266841
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100266841/viewer/2
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100266841/viewer/3

なお本文庫は、新日本古典籍総合DBにおいて、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 ライセンス CC BY-SAで公開されている。適切なクレジットさえ付せば、所蔵機関への申請は不要で資料を利用できる。ぜひ活用戴きたい。

こんな古典籍があった！～拠点大学古典籍画像紹介～第7回

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各大学おすすめの一点をご紹介していきます。

●同志社大学図書館所蔵『源氏八景（げんじはっけい）』

URL:https://doi.org/10.20730/100300455

「源氏八景」とは中国の伝統的な画題である瀟湘八景（しょうしょうはっけい）に倣い、源氏物語から八場面を選んだもので、本作品は詞書（ことばがき）と絵が完備した豪華な装丁である。詞書を書いた八人の公家の氏名と官職を記した極書（きわめがき）によると、本作品の成立時期は安永六年（一七七七）八月二〇日から一一月二九日までに絞られ、田沼時代に制作された名品である。顔料も上質であり、御用絵師の可能性も考えられる。絵を伴う源氏八景は数本しか確認されず、その意味でも貴重である。

（該当部分を見る：https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100300455/viewer/15）

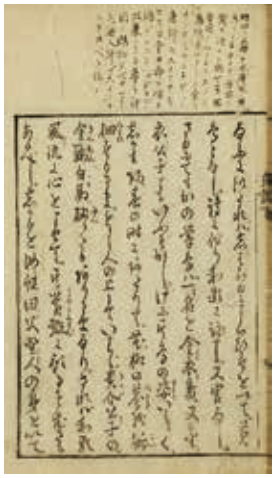
●九州大学附属図書館所蔵『蟲乃諫（むしのいさめ）』江邨北海（えむらほっかい）著、（宝暦一二年）

URL: https://doi.org/10.20730/100309806

昆虫博士江崎悌三（えざきていぞう）先生蒐集の「江崎文庫」所収。本草学の和漢書が充実する文庫中、本書は昆虫学史の研究にも注力した博士が「昆虫文学」と扱う一冊。一八世紀後半の漢学者による異色の戯作（げさく）である。

「われ」が、夜中烏合する虫たちに、和漢の故事を引照しながらそれぞれの善悪を糾す。蛍は文学者、蜂蝶は軽薄、玉虫は好色、蟋蟀（こおろぎ）は虫の王者。虫に仮託し人間を風刺する。

九大本下巻には、「われ」の批判に対し「蛙曰く」と突っ込む旧蔵者の書入れもありおもしろい。



（該当部分を見る［右］：https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100309806/viewer/4）
（該当部分を見る［左］：https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100309806/viewer/65）

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ（https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html）を必ずご確認ください。

掛川の俳人・柿園嵐牛が伝えた俳諧資料 デジタル公開へ

嵐牛俳諧資料館（静岡県掛川市）と覚書を締結いたしました。

今後、嵐牛俳諧資料館が所蔵する俳諧を中心とした江戸時代以前の資料のデジタル画像化とWEB上での一般公開を進めていきます。

ポーラ文化研究所の化粧文化に関する資料をWEB公開へ

ポーラ文化研究所と、覚書を締結いたしました。

ポーラ文化研究所所蔵の化粧文化に関連する古典籍・浮世絵約三百点を高精細デジタル画像化し、国文学研究資料館およびポーラ文化研究所のサイトで二〇二一年春に公開予定です。

「奥奉公出世雙六」ポーラ文化研究所所蔵

「古典の百科、江戸学の宝庫」東北大学狩野文庫をデジタル公開へ

東北大学附属図書館所蔵狩野文庫の古典籍のうち二百三十二点を九月二十四日に「新日本古典籍総合データベース」（東北大学附属図書館所蔵狩野文庫画像一覧 カラー／モノクロ）で公開しました。

今後も順次デジタル化を進め、WEB上で一般公開してまいります。

「四季献立式」東北大学附属図書館所蔵

紹介

東京学芸大学の司書である瀬川結美さんが昨年度ポーランドで開催されたInternational conference "Collections - Encounters - Inspirations" における発表で、新日本古典籍総合データベースについても紹介してくださいました。

イベント報告

日本語学会二〇二〇年度秋季大会、第五回 関西教育ICT展、第二十二回図書館総合展の詳細につきましては八ページ～九ページをご覧ください。

■十一月七日（土）、第六回日本語の歴史的典籍国際研究集会をオンラインで開催しました。

当日の発表は歴史的典籍NW事業のウェブサイトで視聴可能です。

https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sympo2020.html

協定書・覚書の締結

・嵐牛俳諧資料館（覚書 二月十三日）
・フリーア美術館／アーサー・M・サックラー・ギャラリー（スミソニアン協会）（覚書 六月十五日）
・東京学芸大学（覚書 十月五日）

新日本古典籍総合データベースのお知らせ

新日本古典籍総合データベースは二〇二〇年十一月の時点で、八千点を越える古典籍に延べ七十万以上のタグが付与されています。タグの検索で思いがけない書物との邂逅があるはずです。

ふみ 第16号は、令和3（2021）年6月発行予定です。

■表題の背景色は白梅色（しらうめいろ）です。紅梅よりも淡い色で、「万葉集」でも雪に例えられ、多く詠まれました。「梅花の歌」の序文は年号令和のもととされ、よく知られています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』（本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本）を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所（現IHI）創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」（活版印刷見本帳）を利用しています。

ふみ
「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター
第15号
〈発行日〉
令和3（2021）年1月15日
〈編集・発行〉
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター
〒190-0014
東京都立川市緑町十一三
TEL 050-5533-2988
FAX 042-526-8883
http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/

『雛本古筆絵鑑』がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。